

医療の沸騰点



— 育児、学童保育の不備は
福祉と医療で対応したらよい —

今月の20日、社会福祉法人こうほうえん（理事長 廣江研氏が、ウチの研究所から徒歩3分のところに、認可保育所「キッズタウン東十条」と児童デイサービス「キッズタウンあとりえ」を竣工される。既に北区の浮間というところでキッズタウンをされているし、品川区に特養ホームと保育園を合築されている。小学校の跡地の再開発である。その他に、島根県などいろんなところで老人と幼児の合体系サービスがあるという話はきいているし、いいことだ。経営にいいというより、地域支援としていいことだと思う。

大阪府堺市の社会医療法人ベガサスも、育児支援は熱心だし、こんどは認可の保育所を新設する。急性期病院、DPC病院だから育児支援が必要だ。急性期病院に絶対必要な退院後の生活を支援し、保障するサービスが必要なので。キッズタウン東十条の近くには、公立保育園がある。区立図書館の二階にあり、キッズタウンが来るのを意識したのかどうか判らないが園庭の改修工事をしていて、ウ

チの斜め前にあるので騒音が煩かつたぞ。

先月号にも書いたが、民間の認可保育所と公立の保育所のサービス競争は、多くの場合、民間保育所が楽勝だ。地方公務員の保育士と民間企業の職員の保育士では、根性がちがうからだ。ただし、施設長が公務員の発想では、民間でも保育士は公務員になる。

先の社会医療法人ベガサスのいわゆる院内保育所兼学童保育所では「英語教室」がある。わたしが強く勧めただけに、うまくいかないとわたしに責任があるが、とてもうまくいっている。ノバにいたニュージージーランド人の教師がやっている。マジメな人だし、なにによりハングリ―精神がある。

たいていの人は、英語の教師は人件費がかかるから……、とおっしゃるのだが、先日、ベガサスの老健施設に行ったらリネンの整理と確認の仕事をしていて。主として英語教室は夕方からだし、なにしろハングリ―な人だから遊んでなんかいない。大企業が外国人留学生を優先採用するのは、当然だ。急性期病院も慢性期病院も老人施設も、育児・学童支援は絶対に必要だ。これは、わたしの信念でもある。GDPが世界一の米国では、ベビーシッターを雇用する富裕層もいるが、わたしの見た急性期病院はなんらかの形態で保育園をもっていた。多くは、フィット

ネス施設（それも巨大な）と合築であり、ある病院は救命救急隊の出勤所が隣接していた。

マンパワーを必要とする福祉と医療なのだから、どこの国だって育児支援、学童保育は経営として必要なものである。高知県のこれも社会医療法人の近森会が委託している四国管財という清掃会社は、近森会のみならず他の病院の院内保育所を請け負っている。中小病院は、それを利用すればよい。

米子こうほうえんの廣江研さんといい、社会医療法人ベガサスの馬場武彦さんといい、近森会の近森正幸さんといい、いかにも子ども大事にされる人だし、大きな意味で医療を通じた社会支援の役割を覚知されておられる。だから、経営がよいのだと、わたしは思う。当研究所の「社会医療」の意味については、以前にも書いた。地域支援が社会医療なのだ。

ウチがあるから地域があるんだなんて思いあがりではなく、地域があるからウチがやっていける、それしかないのだ。無人の山で、狐や狸を相手にしているのと、人間さまの集団を相手にするのは、訳がちがうという、簡単なことだ。全国で待機児童が何十万人といえるのなら、いや、地域に待機児童や学童保育が必要な児が一人でもいたら、福祉と医療はそれを解消する役割がある。政府、政治に期待しても、ダメなんだよ!! 岡田